

誰でも英語を初めて勉強したとき、「英語には必ず主語がいる」と聞いて軽いショックを受けた覚えがあるだろう。「雨が降る」でさえ It rains. のように意味的には空の it を主語として立てなくてはならない。フランス語も英語と同じで、「主語にこだわる言語」なのだ。世界中を見回しても、ここまで主語にこだわる言語はそれほど多くはない。それどころかむしろ少数派である。これに対して日本語は典型的な「主語にこだわらない言語」である。「うー、寒い」とか「全部でいくらですか?」とか、主語のない文を私たちは平気で話している。そして何の不都合もないので、フランス語がなぜ主語にこだわるかが理解できない。ここにもふだんは見えないフランス語の仕組みが隠されている。この問題について少し考えてみよう。

#### 文の戦略拠点としての主語

フランス語の文型は英語とほぼ同じなので、英語の5文型を参考にしてみよう。Sは主語、Vは動詞、Oは目的語、Cは補語を表わす記号である。

S	V	Dogs bark.	「犬は吠える」		
S	V	C	John is tall.	「ジョンは背が高い」	
S	V	O	I ate chicken.	「私は鶏肉を食べた」	
S	V	O	O	I gave Mary a book.	「私はメアリーに本をあげた」
S	V	O	C	I made him angry.	「私は彼を怒らせた」

このうちS V O Oはフランス語にはないので、J'ai donné un livre à Marie. のように、直接目的語・間接目的語という文型になる。また補語はフランス語では属詞と呼ばれている。これを除けばフランス語と同じだ。見てわかるように、すべての文型に含まれているのは主語と動詞である。動詞は文の中核だからいつでもあるのは当然だが、主語もまた欠かせないのが英語でありまたフランス語なのだ。なぜ英語やフランス語はここまで主語にこだわるのだろうか。

この問題をフランス語作文という具体的な場から考えてみよう。私が教師として痛感するのは、日本語をフランス語に変換するときいちばん難しいのは「何を主語に立てるか」ということだ、という点である。主語を正しく選ぶことができれば、そこを出発点として文をうまく組み立てることができる。もし主語の選び方で失敗すると、そのあとはどうやっても挽回することができず、文はグズグズになってしまう。主語は文構成の「戦略拠点」なのである(本当は橋頭堡と言いたかったのだが、死語を話す人になりそうなのでやめた)。

たとえば「遠くに船が見える」をフランス語に訳してみる。日本語では「船が」が主語だから Un bateau ... を主語にして文を組み立てようとするとうまくいかない。

「見える」を代名動詞 *se voir* で訳そうとすると、*Un bateau se voit au loin.* となるが、これは「船というものは遠くに見えるものだ」という一般論でおかしな意味になってしまう。正解は *Je vois un bateau au loin.* で、日本語では表現されていない知覚主体の「私」を主語に立てなくてはならない。「私たち」を意味する *on* を使って、*On voit un bateau au loin.* でもよい。日本語とフランス語では主語として選ばれるものがずれるという点が大事なのだ。これは5文型をいくらにらんでいてもわからない。

「70年代には大事件がいくつも起きた」という文はどうか。主語は「大事件」だから *Plusieurs événements importants....* を主語にして訳すことができる。このやり方を採った (1) は日本語の文型に近いが、(2) のような訳し方に出会うと「ヤラレタ」と思わないだろうか。これはプロの訳し方である。

(1) *Plusieurs événements importants se sont produits dans les années 70.*

(2) *Les années 70 ont vu se produire plusieurs événements importants.*

(1) と (2) とではどちらが日本語の原文の意味に近いだろうか。(2)の方が近い。(1)はむしろ「大事件が70年代にいくつも起きた」に近い。なぜだろう。

#### フランス語の好む表現パターン

上の例から次のことがわかる。「船が見える」のように日本語の語感からすれば「自然に起きること」のように思われることでも、フランス語では *je vois* と「私が何かする」かのように表現する。その昔、ブルームフィールドという有名な言語学者が、「英語で好まれる表現形式は actor action だ」と言ったことがある。つまり「誰かが何かをする」という表し方である。フランス語では英語以上に、この「誰かが何かをする」というパターンを好むのである。好きがこうじて本来は「人」であるはずの「誰か」が「人」でなくてもかまわないというところまで行ってしまった。このため「この料理を食べると胸がムカムカする」は、*Quand je mange ce plat, j'ai mal au cœur.* と複文で訳せるのだが、「誰かが何かをする」の「誰か」に「この料理」を持ってきた *Ce plat me donne mal au cœur.* という表現形式の方がはるかにフランス語的になる。これがフランス語の生理である。このとき *ce plat* は「何かをする人」ではなく「何かの原因になるモノ」と捉えられている。フランス語の主語には本来的に、「何かをする人」「何かの原因になるモノ」という意味がつきまとう。そして「する人」「原因になるモノ」をまず主語に立て、その結果何かの事態が引き起こされるという表現パターンを異常なまでに好むのである。これがフランス語で文を作るとき、主語が「戦略拠点」である理由のひとつなのだ。

上の例 (1) と (2) を較べてもうひとつ分かることがある。それは主語が「話題」を表わすということだ。(1) は「いくつもの大事件」を話題に立てた文と読むことはむずかしい。主語に *plusieurs* という数量表現がついているからである。*Trois enfants sont venus.* という文を、「3人の子供」を話題として「彼らが何をしたか」というと、

やって来たのだ」という意味に取ることはできない。この文は「子供が3人来た」というひとかたまりの出来事を表わしている。数量表現がついた主語は話題にはならない。一方、(2)の主語の *les années 70* は文の話題となっている。(2)は「70年代について言うと、その時代には大事件がいくつも起きた」という意味である。だから原文の「70年代には大事件がいくつも起きた」の意味により近い。日本語では助詞の「は」が話題を表わすからである。

以上をまとめると、フランス語の主語は i) 「何かをする人」「何かの原因になるモノ」という意味と、ii) 「文の話題」という意味を同時に表わしている。i) は文の意味そのものに、ii) は話し手による意味の「伝え方」に関係するので、本来ならば別々のレベルに属する事柄なのだが、両者は競合して主語として実現される。フランス語がこれほどまでに主語にこだわるのは、この i) と ii) という文の組み立て方にとって大事な意味を、主語が一人二役で演じているからなのだ。

### 主語を掘り起こす

それではフランス語的発想に縁なき衆生である私たちはどうすればよいのか。これから述べようとしている事態のなかから主語に立てるものを掘り起こす作業が必要なのである。上にあげた「遠くに船が見える」では、知覚主体である「私」を掘り起こして、*Je vois un bateau au loin.* と主語に立てなくてはならなかった。

「ポール君が運転中の不注意で事故が起きた」という事態だとどうなるだろうか。何を主語に立てるかで、できあがる文がずいぶん変わってくる。「ポール君」を主語に立てたとすると(4)のようになる。Paul は話題であると同時に、事故を起こした人である。「不注意」を主語に立てると(5)のようになる。「不注意」は事故の原因として捉えられている。このように「不注意」のような抽象的なものも主語に立てて、あたかもそれが何かをするかのように表現するのがフランス語的発想である。

(4) *Paul a eu un accident à cause de son inattention.*

(5) *L'inattention de Paul a entraîné un accident.*

次に少し微妙な例を見てみよう。「頭が痛い」は英語では *My head aches.* で、「頭」を主語にしてそれが「痛む」という表現になる。フランス語では *J'ai mal à la tête.* がふつうだが、*La tête me fait mal.* という言い方もできる。ところが「この傷が痛い」は *Cette blessure me fait mal.* であって、× *J'ai mal à cette blessure.* とは言えない。これはなぜか。頭は私の体の一部だが、傷はそうではないからである。*j'ai mal à ~* という表現は、~の所に体の一部を表わす名詞が来るときにしか使えない。これは痛みの原因となるもの(頭、傷)が、私の体の一部かそうでないかという、所有に関わる事情に左右されるということを示している。この問題については「感覚・感情表現」についてお話するときにくわしく取り上げてみたい。

さて、ここで疑問を持つ人もいるかもしれない。どうしても主語が掘り起こせな

いような事態のときはどうするか．例えば天候表現がそうである．雨が降るのは，誰かが雨を降らせているからではない．こんなときに使われるのが，Il pleut. 「雨が降る」，Il fait chaud. 「暑い(気温が高い)」のような非人称主語の il なのである．フランス語はあまりに主語に重い役割を与えてしまったので，主語が考えられないときでも主語の代用として il を立てざるをえないのだ．ご苦労なことである．

もうひとつ便利なのはぼんやりと事態や状況を表わす指示代名詞 ça である．ça は本来「名づけられないモノ」をさす代名詞である．だから事態のなかから特定の物を取り出して主語にしにくいようなときに活躍する．Ça marche bien. 「順調だ」とか，Ça va. 「OKだ」などというときの使い方がこれである．「怖かったよ」Ça m'a fait peur. のように，何が怖かったのかを取り立ててはっきり出さない(出せない)ときには，とりあえず ça を主語にすればよい．

実はこの ça は天候表現にも使われて，Ça pleut. と言うことがある．ただし，Il pleut beaucoup en automne. 「秋には雨がよく降る」のように一般的な述べ方をするときにはça は使えない．本来 ça は話している現場にあるものをさす代名詞なので，Ça pleut. と言うと「今目の前で雨が降っている」という意味にしかならない．ça はくだけた話し言葉で用いると説かれることがあるが，その本当の意味は「話し手と聞き手のいる現場」を必要とするということなのである． (とうごう・ゆうじ)